町長ひとりごと ㊼

斉藤譲

この度、町民会館が優良公民館として、文部大臣表彰を受賞した。今回の受賞は、全国で三十六館であり、その中の一館に加わることができたのである。今日まで、町民会館を拠点として展開してきた社会教育活動の実績が評価されたわけであり、とてもうれしくまた有難く思っている。これも偏に椎名館長をはじめ担当職員の不断の努力と、関係役職員のご指導、更には町民の皆様の各種事業への積極的な参加を通じたご支援の賜だと思っている。

ここに改めて関係者の皆様に深く感謝を申しあげると同時に、これを励みとして更なる精進努力を傾けてゆきたいと決意を新にする次第である。

▼ところで、この表彰式が去る十一月二日文部省で行なわれ、椎名館長と共に出席した。遠い地方の人たちは、前日に地元を発って東京で宿をとり、当日は宿から出向いてきたとのことであり、狭い日本とはいえ距離の長さを感じる一方、わが千葉県がいかに首都と隣接をした地の利を有しているかをつくづくと感じた。

式のはじまる三十分前には、出席者の大半が顔を揃えた。しかしこの間、何の案内もないまま廊下や小部屋で待たされ、お茶一杯のサービスすらなかった。あちこちで「国のお役所というのはこんなものでしょうかね。もし、私たちがこんな対応をしたら、吊あげられた揚句、一発で首が飛びますね。」などと苦笑まじりに話しているのが聞こえた。たしかに国の官庁は、平素接触をするのは一般の国民ではなく、県や市町村の自治体相手であるから、これが当然と思うかもしれないが、ここに集まっている者は、公民館で常に住民と生の接触をしている第一線部隊であるから、こんな応対はとうてい考えられないのであろう。社会教育の総元締であることを思えば、この対応にはいささか淋しい気もした。

▼しかし、表彰式は質素ではあったがたいへん厳粛で、保利耕輔文部大臣から一人一人に表彰状が手渡された。

保利大臣は、あいさつで祝意を述べられたあと、今回の授賞は単に今までの功績に対する顕彰だけではなく、これを契機に地域のモデル公民館として、他の指導的役割りを果たして欲しいという願いがこめられていることを決して忘れないで欲しいと結んだ。全くその通りだと思う。何事もそうではあるが、特に社会教育にはこれといって固定した型がある訳でもなく、これでいいという際限も無い。当町の社会教育も未だ緒についたばかりであり、これからが本格的な勝負どころだと思っている。

▼表彰式の後、各館一名が皇居で、天皇、皇后両陛下の拝謁を受ける光栄に浴した。

即位の礼を間近に控えていたため、途中の警備は厳重を極めたが、広い皇居の中は意外なほどに静寂であった。この日は汗ばむほどの小春日和で、引率する宮内庁の職員の説明する道灌堀りに広がる蓮や、その先の自然そのままの小高い山の木々の葉は、黄色く色づき、深まりゆく都の秋を映していた。一同が案内をされたのは「翠蓮の間」というふだん小食堂としても使われる部屋であった。私たちは正面の両陛下の椅子に向って二列の横隊で並び、緊張した面持で両陛下のお出ましを待った。

▼暫くして、待従長の先導で両陛下が、笑を浮かべながら静かに椅子の前に立たれた。私は陛下正面の後列であったから、陛下との間は五メートルほどである。緊張は一層に増した。文部省の生涯学習局長が、陛下に優良公民館の受賞者一同である旨を奏上した。続いて、天皇陛下からお祝いと、今後更に一層精進をし、地域の発展に尽くされるよう希望しますとの旨のお言葉をいただいた。メモを見ることもなく、ゆっくりとお話しをされる陛下は、何とも言いようのない気高い気品と威厳に満ち溢れ、思わず胸が熱くなるのを覚えた。

そしてまた、くすんだ水色のワンピースをお召しになって、天皇陛下のお側に立たれる皇后陛下は、終始無言ではあったが、にこやかに一同にお向けになるその目差しは、息を飲むほどにやさしくそして慈愛にみちていた。そのお姿は、まるで慈母観音のように私は思えた。無上の感激であった。

▼私はこの時、こんな素晴らしい機会を与えてくれた部下職員をはじめ関係者に心の中で手を合わせるような思いで感謝をした。

同時にまた、本当は第一線で苦労してきた彼等にこそ、この感激の機会を味わわせてやりたかったとも思った。

ともあれ、私はこの感激を終生忘れることなく、初心にかえって、一層頑張る以外にこれに報いる道はないと、両陛下の前でかたく自分の心に誓った。